

大学生のボランティア参加に関する意識

宮城教育大学教育復興支援ボランティア協力員アンケート調査の結果から

小田隆史*・四ノ宮誠也**・木村充希**・吉田絵里奈**
伊藤勇馬**・佐藤武文**・橋本一輝**

Post 3.11 Japan Disaster Volunteerism Consciousness among University Students: Results from a 2013 M.U.E. Student Survey

Takashi ODA, Seiya SHINOMIYA, Mitsuki KIMURA, Erina YOSHIDA,
Yuma ITO, Takefumi SATO and Kazuki HASHIMOTO

要約：2013年6月に、宮城教育大学教育復興支援ボランティア協力員アンケート調査班が実施した、大学生のボランティア参加の実態と意識に関する調査の分析を報告し、そこから見えてくる、ボランティア参加のあり方や実施・周知宣伝方法の課題などについて考察する。

キーワード：学習支援、ボランティア、東日本大震災、大学生

I はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災から3年が経過した。しかし、被災した学校では未だに仮設校舎での授業を強いられている等、社会基盤の回復は十分になされていないのが現状である。震災記憶の風化がマスメディアによって取り上げられているように、月日が経つにつれて被災地と他地域との関係性は希薄化している。

こうしたなか、被災を経験した中学生が高校へ、高校生が大学へと進学するにつれ、学生ボランティア活動における（潜在的）参加者の意識や関心の度合いも変化するとと思われる。現在在学している、又はこれから進学する被災地域に近い場所で生活する大学生が、ボランティア活動に関わり、長期にわたって被災地での復興に貢献し得る人材として、果たす役割は大きい。

そこで本研究では、将来教師になることを目指し、学校教育の専門知識を学び、技能を身につけつつある学生が多く在学する宮城教育大学において、大学生のボランティア活動の実態や要望を調査し、これをもとに今後、復興支援に関するボランティアのあるべき

姿や求められる活動方針を検討することを目的とした。本研究の目的を通じ、被災地復興の飛躍とボランティア活動の効果的な実施の一助となることを願っている。

II 調査手法

宮城教育大学にはボランティア活動を行っている団体が複数存在する他に、学校教育に関する専門知識や技能を活用し、夏季や冬季の長期休業期間において学習ボランティアが実施されている。また、2011年6月28日には、震災によって深刻な被害を受けた学校に通う児童・生徒、現場職員に対する中長期的支援を目的に、「宮城教育大学教育復興支援センター（以下、教育復興支援センター）」が設置され、教員補助や子ども対象・参加イベント等、各種プログラムを展開している。

2012年度には、教育復興支援センターからのプログラムや情報発信に加えて、ボランティア活動の学生間の自主的なひろがりを目指して、「教育復興支援ボランティア協力員（以下、協力員）」が宮城教育大学の1、2年生において組織された。

* 宮城教育大学 教育復興支援センター、** 宮城教育大学 教育学部学生／教育復興支援ボランティア協力員

こうした学生の自主的な活動の一環として、2013年6月に、宮城教育大学に在籍する大学生を対象とするボランティア活動の実態や課題に対するアンケート調査を実施した。なおアンケート調査を実施するにあたり、協力員によるアンケート調査班を組織した。また、アンケートの調査対象は前述の通り、宮城教育大学に在籍する大学生であるが、この中でも協力員を有する1年生及び2年生からのアンケート回収を重視し、可能な限り全数に近づくよう努めた。その結果、アンケート回答数は1年生が328件、2年生からは245件、3年生は86件であり、4年生が10件、さらに学年無回答が1件であった。このアンケート結果をもとに分析及び検討を行ったが、回答数が少なく、傾向を読み取ることが不可能だった4年生については分析結果を割愛している。

アンケートの集計、分析に関してはiPad、Google Driveを活用し、情報処理の迅速化及び分析結果の共有化を図り、調査班員間での議論が円滑に行われるよう留意した。次章で、その分析結果を報告する。

Ⅲ 結果

(1) 宮教大生の被災地学習支援ボランティアへの関心

まず、筆者らは宮教大生がどれだけボランティアに関心があるのかということに主眼を置き、検証した。

以下の図1は、「被災地の学習支援ボランティアに興味がありますか」という質問に対する回答を全回答と学年ごとにグラフ化したものである。

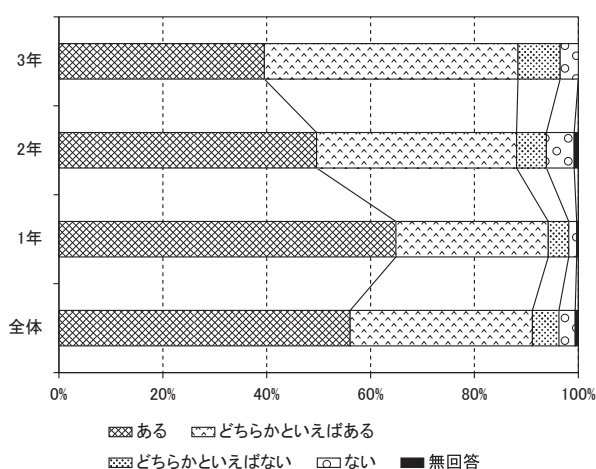


図1 被災地学習支援ボランティアへの関心度（学年別）

この質問に「興味がある」もしくは、「どちらかと言えばある」と答えた人数は611人で、回答者数全体に占める割合は91.1%であり、全体として、ほとんどの宮教大生が被災地学習支援ボランティアに興味を持っているという結果が得られた。同様に、これを学年ごとに見てみると、1年生は310人で、94.2%、2年生は215人で、88.1%、3年生は76人で、88.4%であった。各学年で値に多少の差はあるものの、概ね高い値である。

しかし、「ある」と答えた人数の割合には学年間で差異が見られた。全体では375人で、回答者全体に占める割合は56.0%であったが、1年生は213人で、64.7%、2年生は121人で、49.6%、3年生は34人で、39.5%であった。このように、前述の「ある」もしくは「どちらかと言えばある」と答えた人数の割合よりも、「ある」と答えた人数の割合の方が学年ごとの差が大きく、学年が上がるほどに減少傾向を示すということがわかる。

(2) 興味・関心のあるボランティア

教育復興支援センターに寄せられる教育復興支援ボランティアの要請は、教師補助や休業中の課外授業等の学習支援と、運動会や学習発表会などの手伝い等のイベントに大別される。筆者らは宮教大生がどちらのプログラムに関心があるのかを調査した。

以下の表1は「あなたがやりたいと思う被災地ボランティアがあったら教えてください（複数回答可）」という質問への回答を表したものである。

表1 やりたいと思う被災地ボランティア

	全体	1年	2年	3年
学習支援のみ	153	92	42	19
イベントのみ	189	93	69	26
学習支援とイベント	137	76	45	13
学習支援とその他	1	0	1	0
イベントとその他	3	1	2	0
その他	8	2	5	1
なし	181	66	81	27

全ての学年において、学習支援よりもイベントへの興味が高いという結果が出た。しかし、学習支援のみ

に興味を持っている学生は22.7%，イベントのみに興味を持っている学生は28.1%とその差はわずかであった。また，複数回答も可としたため，学習支援とイベントの両方に興味を持っている学生も多く見られた。これは，ボランティアに興味を深く持ち，取り組む意欲のある学生はボランティアの内容を問わず，参加したいという意志を持っていることが推測される。

(3) ボランティア情報の接点

上述の通り，筆者らが所属する教育復興支援ボランティア協力員は，教育復興支援センターが発信するボランティア情報を各学生に幅広く周知するために組織されたものである。もともと，教育復興支援センターでは各学生に割り振られているメールアドレスにボランティアの募集情報を一斉送信するという形でボランティア情報の周知を行ってきた。しかし，それだけでは周知が不十分であり，学生自身からの直接的な情報発信が必要であるという趣旨で協力員が組織された。そこで筆者らが興味を持ったのは，実際に学生らはどこで，どのようなボランティア情報を得ているのかということである。

まず，全学生がどれだけボランティア情報を見ているかを調査した。図2は，「教育復興支援センターやボランティア協力員が発信するボランティア情報をみたことがありますか」という質問への全回答をグラフ化したものである。

このグラフから全体の6割以上の学生は何らかの形で情報をみているということがわかる。次に，「情報をみている」と答えた学生にどのような手段で情報

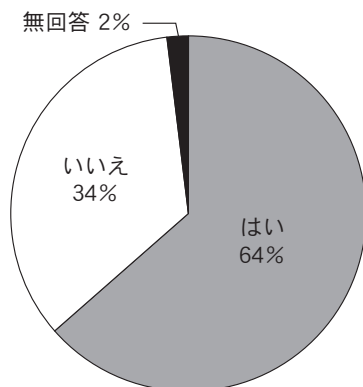


図2 ボランティア協力員からの情報をみたことがある

表2 ボランティア情報を得る手段

	延べ人数	単独回答 (全体)	単独回答 (1, 2年)
ポスター	115	37	29
SNS	129	42	35
協力員	187	70	68
看板	33	4	2
センター	196	71	54
HP	27	6	6
チラシ	24	5	5
その他	2	2	2
無回答	4	3	3

をみているのかを聞いてみた。以下の表2は，「ボランティア情報をどこで目にしましたか（複数回答可）」に対する回答を表にしたものである。

この結果から，情報を得る手段として最も多くの回答があったのはセンターからのメールであった。しかし，単独回答をしている回答者にのみ限ってみると，センターからのメールと協力員からの連絡はほぼ同数となる。さらにその中でも，協力員が存在する1, 2年生に限ってみると，協力員からの連絡が最も多い回答であることがわかる。これは他の情報を得る手段を持っていない人でも協力員からの情報は目にしているということを示すデータであり，協力員の活動意義が示された形となった。

(4) ボランティアに取り組まない理由

筆者らは宮教大の学生がどれだけボランティアに参加しているのか調査した。以下の図3は，「何らかの被災地ボランティアに参加したことがありますか」と

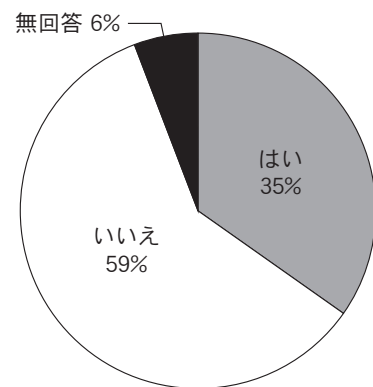


図3 ボランティアの参加経験

いう質問への全回答をグラフ化したものである。

このグラフから全体の6割近くの学生はボランティアの参加経験がないと答えている。しかし、ここでは調査の実施時期を考慮に入れなければならない。なぜなら、多くの学生がボランティアに参加する期間は夏休み中であり、入学したばかりの1年生は特に最初の夏休みが初のボランティア経験となる場合が多い。しかし、筆者らが調査を行ったのは夏休み前の6月であるため、ボランティアに参加しようとしてもできていなかったという事情が考えられる。そのことも踏まえつつ更に筆者らは、学生がボランティアに参加しない理由としてどのようなものがあるか調査した。以下の表3はその結果を表にしたものである。

回答数の延べ人数を見ると、多く挙げられているのが、「きっかけがなかった」、「アルバイト・部活動など自分のことで精一杯だった」、「時間がなかった」という3つの理由である。ここでも、複数回答可としたため学生たちが最も大きな理由として挙げているのは何かを知るべく、単独回答をしたものを抽出した。そして、延べ人数に占める単独回答の割合を全体と1、2年生について求めた。1年生に見られた傾向は「きっかけがなかった」という単独回答が延べ人数に占める割合が全体や2年生よりも多いことである。この結果からも、1年生に対するアンケートは重要なボランティアの参加機会である夏休みを経していないことを考慮しなければならないことがわかる。また、2年生では「アルバイトや部活動など自分のことで精一杯だった」という単独回答が延べ人数に占める割合が全体や1年生よりも多い傾向にあった。

表3 ボランティアに参加しない理由

	延べ人数 (全体)	単独 (全体)	単独/ 延べ人数 (%)	延べ人数 (1年)	単独 (1年)	単独/ 延べ人数 (%)	延べ人数 (2年)	単独 (2年)	単独/ 延べ人数 (%)
きっかけ	208	95	45.7	123	58	47.2	63	25	39.7
バイト・部活	160	46	28.8	79	22	27.8	62	20	32.3
関心	18	5	27.8	5	0	0.0	13	4	30.8
交通手段	35	4	11.4	20	2	10.0	6	0	0.0
時間	169	55	32.5	101	37	36.6	47	11	23.4
不安	45	13	28.9	22	6	27.3	16	4	25.0
無回答	23			10			10		

(5) 震災経験とボランティア活動経験の関係

筆者らは、学生たちの被災地を訪れた等の個人的経験がどれだけボランティア参加につながっているか調べた。以下の表4は行に「被災地の学習支援ボランティアをしたことがありますか」という質問への回答、列に「震災を通じての個人的な経験を伝えたいですか」という質問への回答を並べたものである。

表4 震災経験とボランティア活動経験の関係

個人的経験/ ボランティア経験	はい	いいえ	無回答
ある	16	100	1
ない	74	443	3
無回答	1	2	1

ここでは、ボランティア経験があると答えた117人の中で、個人的経験を伝えたいと答えた人は16人で、全体の13.7%、ボランティア経験がないと答えた520人の中で個人的な被災に関する経験を伝えたいと答えた人は74人で全体の14.2%であった。このことから、必ずしも個人的な経験がボランティア経験につながっているわけではないということが伺える。

IV まとめ

(1) 宮教大生の被災地学習支援ボランティアへの関心

「被災地支援の学習支援ボランティアに興味がありますか」という問いに対して「ある」と答えた学生が特に1年生に多いという結果が得られた。これは、学年が上がるにつれてアルバイトや部活動などといったボランティア以外の活動にも関わるようになっていたり、教育実習や教員採用試験、その他の就職活動等により

多忙となったりしていることが背景にあるのではないかと考えられる。これを踏まえれば、次年度以降、特に新1年生に力を入れてボランティアへの参加機会に関する情報提供を呼びかけるべきと言える。

(2) 興味のあるボランティア

「あなたがやりたいと思う被災地ボランティアがあったら教えてください」という問いに対して、学生の回答は学習支援とイベントのいずれかに偏ることはなかった。教育復興支援センターに寄せられる情報は主に学習支援のボランティアへの参加の呼び掛けが中心であるが、学習支援に限らず幅広いジャンルのボランティア情報を伝えることが宮教大生のボランティア意識を高めることにつながるのではないかと考える。

(3) ボランティア情報をどこで目にするか

「ボランティア情報をどこで目にしましたか」という問いに対しては教育復興支援センターからのメールと協力員からの情報を受け取っている宮教大生が多かった。このことから、教育復興支援センターによる呼びかけと協力員の連絡双方が効果を挙げているという結果が得られた。また、協力員が在籍している1、2年生では他の情報を目にしていなくとも、協力員からの情報は目にしていると答えた人が多かったことから、協力員による情報発信が効果的だったと言える。

(4) ボランティアに取り組まない理由

「ボランティアに参加しない理由」として1年生では、きっかけがなかったという回答が多かった。また、

2年生はアルバイトや部活で時間がなかったという回答が多く寄せられた。1年生は、アンケートをとった時期がボランティア活動の盛んになる夏休み前だったため夏休み終了後にアンケートをとったならば、異なる結果が得られるのかもしれない。したがって、(1)でも挙げたが、1年生にはボランティア活動に取り組むきっかけを与えられるような宣伝活動を行っていくべきである。

また、2年生以上は先述のようにバイトや部活など、そのほかの活動に時間がとられやすくなってしまうので、より早い学年からのボランティア参加を呼び掛けるべきという傾向が顕著になっている。

(5) 個人の経験とボランティア経験の関係

今回の調査では個人の経験はあまりボランティア経験に反映されないという傾向があった。このことから、ボランティア活動は限られた思い入れの強い人だけが取り組むものではなく、幅広い人に呼びかけを行い、むしろ参加することでより強い思い入れを持たせるような支援を行っていくべきである。

以上、本研究では、入学後間もなくの新1年生を含む全学年の学部学生を対象に、東日本大震災の復興支援ボランティアに関する意識や関心、情報入手ルートなどについて聞いたアンケート調査の結果と考察を示した。こうした結果や傾向を踏まえ、次年度以降の、効果的な教育復興支援ボランティア活動の実施につなげて行きたい。

付記

本アンケート調査にご回答いただいた学生に記して感謝申し上げます。

本研究は、センター付教員である小田による指導、原稿校閲のもと、アンケート調査班長の四ノ宮が調査の総括、分析・考察の執筆、伊藤が冒頭の説明を執筆、佐藤がまとめ部分の執筆、その他のメンバーが協力して調査票の作成、配布、結果のとりまとめを行った。本研究の集計に当たり、板垣翔大氏（宮城教育大学大学院修士課程）及び分析にあたり、庄子元氏（東北大学大学院博士課程）にご協力を賜った。